通説の修正から開かれる沃野

林　文孝

阿部泰記著
宣講による民衆教化に関する研究

A5判　716頁
汲古書院
［本体18000円＋税］

本書の研究の出発点は、胡士瑩『話本小説概論』（中華書局、一九八〇年）における清末の劉省三作『躋春台』についての定義「最後一種擬話本集」であった。著者・阿部泰記氏の前著『包公伝説の形成と展開』（汲古書院、二〇〇四年。以下「前著」と称す）が示すとおり、著者のそのときの関心は「包公案」を含む公案小説にあり、その関心からチェックされたのであろう。ところが、『古本小説集成』所収の影印本を目睹するに及び、登場人物の歌詞を挿入し末尾を教訓で締めくくるその文体が、民衆教化のための聖諭を説き聞かせる「宣講」、とりわけ、その教条を具体的案件を通じて理解させるための「案証」故事に近いことを確認する。したがって、『躋春台』は擬話本集ではなく、宣講書というべきものであった（以上、第一章第一節）。話本小説史にかかわる通説の修正という、それ自体意義ある結果が得られたわけである。

ところが、著者の探求はここに止まらない。宣講書や宣講それ自体の研究へと乗り出したのである。著者の方法を特徴付ける「行脚と収集」（前著に対する須藤洋一氏書評、『東方』二八六号）は、ここでも健在である。行脚の面では、二〇〇二年に始まる「漢川善書」調査等の実態調査が代表的だ。また、収集面では、情報環境の整備も著者を助けた。「あとがき」等で明記されるのは沖縄県立図書館での東恩納寛惇収集資料のデジタル化公開であるが、それに加えて、孔夫子旧書網出品等のデータも最大限に活用されているのが注目される。

かくして世に問われた本書は、博士学位論文にもとづく前著をも上回る大冊である。そして、その内容たるや、現代に

まで及ぶ宣講の伝統ならびに各種宣講書についての新知見の宝庫である（『宣講集要』等の案証集の紹介・分析については陳兆南氏の先行研究が存在するとのことだが、本書の対象範囲のほうがはるかに広いことは容易に推測できる）。

序章に続き、以下の五章が排列される。「第一章　宣講の歴史」、「第二章　聖諭分類の宣講書」、「第三章　非聖諭分類の宣講書」、「第四章　物語化する宣講書」、「第五章　新しい時代の宣講」。そして、結語である。このうち、第二章～四章（第五章第一節も）は、おおむね節ごとに一種の宣講書を取り上げては、その内容を紹介し、特徴を分析する。書物単位・案証単位の紹介・分析、ほぼ同一形式でのその反復はときに煩瑣にも感じられるが、しかし、その基礎作業あってこそ、各種宣講書における案証の継承や改編などの相互関係が、蔚然たる全体として浮かび上がってくる。その過程で、『宝巻六種』として目録記載される吉林省図書館所蔵の写本について、それを『宣講宝銘』巻二と同定するといった新発見も淡々と叙述される（第四章第三節）。しかも、話題は個々の宣講書だけにとどまらず、現代に至るまでさまざまな形式で保ち続けられている宣講の持続力、日本における宣講受容にまで及ぶ。評者自身は、思想研究の立場から、第一章で扱われた明清時代の郷約推進者たちに興味を持っているが、本書が提示したその後の宣講の多様な展開と生命力は、一驚に値するものであった（二〇〇〇年代の半ば、評者は山口中国学会で著者の「漢川善書」についての研究発表に接し、「宣講」がまだ続いていたのかと本当に驚いた覚えがある）。

各宣講書の分析に当たって、ほぼ必ず西南官話の語彙の有無がチェックされているのも特筆すべき点である。そもそも、宣講書の開祖とされる『宣講集要』は、四川で編纂され、四川の案証が多く、西南官話の語彙を多く含んでおり、四川の聴衆に向けて作られたものと判断された。それに対し、その案証を後続書が受け継ぐ等した場合に、西南官話語彙はどの程度保持されているのか。結果は作品ごとに様々であるが、『漢語方言大詞典』を丹念に引き合わせたからこそ得られる信頼性の高い結果がここには示されている。

さて、本書の以上の内容を通じて、説唱宣講の歴史について著者はどのような展望を描いているか。評者なりにまとめ直してみよう。一、それは清末の四川に始まり、中国全土に広まった。二、その内容構成は当初「聖諭十六条」や「聖諭六訓」（六諭）の枠組みによっていたが、しだいに孝弟義貞等のテーマに偏重して一般的な勧善懲悪となった。さらに、時代の変化とともに新知識の伝授の役割等も担わされた。三、そのスタイルは歌唱部分を増やし、物語としての起伏を増や

して娯楽性を強める方向に変化していった。

この展望の中で、私にとってとくに興味深かったのは、四川という地域との関連である。すなわち、宣講書の事実上の開祖（ただし、案証の取材源となった先行書はあるわけだが）『宣講集要』に加え、『緩歩雲梯集』、『万選青銭』、『萃美集』が四川で作られているし、その他の地域で作られた宣講書でも、四川が舞台の案証が引き継がれたり、西南官話がそのまま使われていたりといった例には事欠かない。何よりも、本書の出発点となった『躋春台』も四川で作られたものであった。清末以降の宣講の一大発源地が四川にあることについて、従来から指摘はあったが、本書の豊富な事例により改めて強く確認されたといえる。

ところが、四川との関連で、さらに扶鸞（降霊）と宣講との関わりが先行研究で指摘されているのだが、本書ではその関わりはあまり強調されない。私が念頭に置いているのは、とくに武内房司氏の研究成果である（「清末四川の宗教運動――扶鸞・宣講型宗教結社の誕生」、『文学部研究年報』（学習院大学）三七、一九九〇年）。著者も武内論文は一箇所で参照しているが、論旨の本質的部分には触れていないようである。しかるに、四川地域における宣講と扶鸞との結合（そこから、宣講を場としてセクトの布教までもなされるようになっていた）という事情は、皇帝の聖諭にとどまらず、神明の聖諭をも教条として宣講儀礼を行うという『宣講集要』所掲の規則にも符合する。また、本書で紹介される後続宣講書の随所に扶鸞の軽視を戒めるモチーフ、竈神や文昌帝君等による因果応報の案証が登場することについても、理解のための重要な前提を成すように思われる。

本書において私が最も違和感を覚えるのは、構成の方法である。一見したところ、聖諭分類から非聖諭分類へ、そして物語化し、新しい時代へ、といった順序が想定されているかのようだが、決してそのような単線的な展開でないことは、本書の具体的分析それ自体が示している。さきほど述べた扶鸞信仰との関わり等の別の補助線を引くならば、もっと違うかたちで、各種宣講書の時代的展開をトレースできるかもしれない。ちなみに、「新しい時代の宣講」として取り上げられる吉林の『宣講大成』は、私にはむしろ伝統的側面もかなり強いように思われた。案証分類に用いられた「孝悌忠信礼義廉恥」の八徳について、著者は民国時代の徳育の基本と捉えており、なるほど引用される説明内容は近代的なのだが、実はこの八徳のセットは明初に遡れるものであり、また清末の善書に盛んに採り入れられていたという（酒井忠夫『増補中国善書の研究　上・下』国書刊行会、一九九九・二〇〇〇年）。

もう一点指摘しておきたいのは、「宣講」という言葉の意味が、本書の中で必ずしも一定していないように思われることである。「宣講」を民衆教化のための行為を指す広義と、それと特に結びついていた文学・芸能史上の特定ジャンルを指す狭義とに区分することができるなら、私にとっては格段に分りやすくなるのだが、どうだろうか。

すなわち、本書各所の記述から理解する限り、「説唱宣講」という特定のスタイルでの宣講ならびにそのための案証集が、本書の主要な対象である。教訓と、それを実証する物語の語り部分と、登場人物の台詞やストーリー展開そのものにかかわる歌唱部分とが、一体化したかたちで構成された語り物、それが説唱による「宣講」であり、内容に即すれば「案証」（事案による実証）である。そこでの「宣」は歌唱部分、「講」は語りの部分を指すことになっている。

ところが、本書で扱われている宣講には、説唱以外の形式によるものもある。第一章第四節に示される歌謡・宝巻・演劇等の形式、さらには第五章第三節に示される各種通俗芸能などがそれだ。その場合、宣講とは、どんな形式にしろ、何らかの教条を「宣」（読誦）し「講」（講説）して普及・浸透させる行為という、原義的な意味合いになるだろう。

こうした民衆教化行為としての「宣講」については、内容に即した区分も可能である。まずは「聖諭宣講」から発生し、やがてその聖諭の中には皇帝のみならず神明の訓示も含まれるようになった。その中心的形式となったのが説唱宣講なのであろう。しかし、時代の変化に伴い、聖諭に代わって宣講されるべきものと位置づけられたのが、政府の方針や政策、新知識といったものであり、これが本書で言う「政策宣講」につながると思うのである。

以上、いくつかの疑問点や違和感を挙げてみたが、個々の節が提供している基礎分析の確かさ、面白さを損なうものではあり得ない。むしろ、そうした基礎分析が提示されたからこそ、読者はそれをもとに、さらに異見や想像を逞しゅうすることも可能なわけである。私の希望としては、一つの通説を書き換えることから新たな研究領域が開けていった次第を含めて、ぜひ一般書にもまとめ、この魅力的な研究に触れる人を増やしていただきたいと願っている。

最後に、引用資料の翻訳は、それ自体一読に値する。とくに歌唱部分、「攢十字」の十言定型句（基本的に「三・三・四」に区切れる）を訳されたところは、意味は的確で調子も整えられ、しかも適度に俗っぽく、至芸だと思う。

（はやし・ふみたか　立教大学）